

ファイズエワ ザリナ
(東京外国語大学大学院)

要旨

タジク語には2つの過去分詞が存在する。過去語幹に *-a* が付されて作られる過去分詞1 (標準語: *kard-a* 「～して、～した…」) はペルシア語にも対応物が存在する一般的な過去分詞である。過去語幹に *-agī* が付されて作られる過去分詞2 (標準語: *kard-agī* 「～して、～した…」) はタジク語特有のものである。先行研究によると、標準語ではいずれも形容詞的、名詞的、副詞的用法を持ち、主な違いは文体であるという。

サマルカンド・タジク語の母語話者である発表者は、当該言語の2つの過去分詞の間にはっきりした使い分けがあると考え、それを立証するために録音資料を用いて定量的調査を行った。調査の結果、過去分詞1は副詞的用法、過去分詞2は形容詞的用法と名詞的用法の例のみが抽出され、これらが相補分布していることが示唆された。前者はウズベク語の副動詞 *-(i)b*、後者は形動詞 *-gan* と対応することから、当該言語ではウズベク語との接触により2つの過去分詞の分布が相補的になったと考えられる。

0. はじめに

本稿の目的は、サマルカンド・タジク語¹の過去分詞の用法を明らかにすることである。タジク語には2つの過去分詞が存在する。過去語幹²に *-a* が付されて作られる過去分詞1 (標準語: *kard-a* 「～して、～した…」) は、ペルシア語にも対応物が存在する一般的な過去分詞である。過去語幹に *-agī* が付されて作られる過去分詞2 (標準語: *kard-agī* 「～して、～した…」) は、タジク語特有のものである。本研究では、サマルカンド・タジク語において2つの過去分詞が相補的に使用されている可能性を提示し、ウズベク語との関連性を明らかにする。

本稿におけるタジク語 (サマルカンド・タジク語を含む) の表記は Windfuhr and Perry (2009) のラテン文字転写を、ウズベク語は正書法を用いて表記する。なお、特に断りのない限り、訳文、グロス、表・例文番号は発表者によるものである。

1. 先行研究

本節では、タジク語の過去分詞に関する4つの先行研究の記述をまとめ、問題提起を行う。

1.1. Perry (2005)

Perry (2005: 267) によれば、この2つの過去分詞の主な違いは文体であり、過去分詞2が口語体でより頻繁に使われるという。過去分詞2について Perry (2005: 267) は、過去分詞1に比べて機能的な多様

¹ ウズベキスタンのサマルカンド州で話されるタジク語 (印欧語族インド・イラン語派) の方言を本稿ではサマルカンド・タジク語と呼ぶ。

² タジク語の全ての動詞は「現在語幹」と「過去語幹」を持つ。過去語幹は動詞の不定形から *-an* を削除することで作られる。過去語幹は過去形と過去の受動分詞などを作る (Windfuhr and Perry 2009)。例えば、*kardan* ‘to do’ の過去語幹は: *kard-*、現在語幹は *kun-* である (Ido 2005: 42)。

性が存在すると述べている。Perry (2005: 267-270) は、過去分詞 1 と過去分詞 2 の用法を形容詞的、名詞的、副詞的な用法に分類している。

① 形容詞的用法

過去分詞 1 は、主要部名詞にエザーフェ³を付すことで主要部名詞を修飾する。他動詞から作られた過去分詞は受動的な意味になり、自動詞から作られたものは過去に完了した動作を指す（自動詞の例：sol-ho-i guzašt-a [year-PL-IZ pass(PST)-a] 'past years'）。

Perry (2005: 268, 270) は、過去分詞 2 の用法は基本的に過去分詞 1 と同一であると述べ、次の例などを挙げている（例：zamin-i ġalladon-aš daravid-agī [field-IZ grain-3SG.POSS harvest(PST)-agī] 'a field with its grains harvested' (Perry 2005: 270)）。

② 名詞的用法

過去分詞 1 は、他動詞から受動名詞 (patient nouns) を作り、自動詞から能動名詞 (agent nouns) を作る。過去分詞 2 は、アドホックな（その場限りの）名詞を作る。いずれも、他動詞から作られた過去分詞は所有代名詞や動作主を表す名詞的な接語と一緒に非常によく使われる。なお、以下に挙げる (1-4) の例文および英訳は Perry (2005) によるもので、グロス は発表者が付けたものである。

過去分詞 1 の例：

- (1) navišt-a-ho-i matbuot
write(PST)-a-PL-IZ press
'the writings of the press'

過去分詞 2 の例：

- (2) ana kitob-i ovar-d-agī-am
there book-IZ bring(PST)-agī-1SG.POSS
'here's the book that I brought'

③ 副詞的用法

いずれの過去分詞も、特に過去分詞 1 は、副詞的なフレーズで頻繁に使われる（過去分詞 1 の例：oftob na-baromad-a [sun NEG-rise(PST)-a] 'before sunrise' ('the sun not having risen')；過去分詞 2 の例：guft-agī barin [say(PST)-agī like] 'by the way/tell me'）。

1.2. Ido (2005)

Ido (2005: 46) は、本発表での過去分詞 1 を「完結相副詞的分詞」(perfective gerund) (5) と「文章語的過去分詞」(literary past participle) (6) に分け、過去分詞 2 を「過去分詞」(past participle) としている。(3, 4) の英訳は Ido (2005: 49) による。

完結相副詞的分詞 (perfective gerund)

- (3) qalam-ro šikast-a ba man daroz kard.
pencil-OBJ break(PST)-a to I hold.out(PST).3SG
'having broken the pencil he handed it to me' / 'he broke the pencil and handed it to me'

文章語的過去分詞 (literary past participle)

³ Ido (2005: 26) によると、エザーフェ (izafet) はタジク語の所有標識の一つである。被修飾語にエザーフェ -i が付き、その後には修飾語が続く。

- (4) qalam-i šikast-a
pencil-IZ break(PST)-a
'the broken pencil'

以下、Ido (2005: 65-66) の記述をまとめる。

タジク語の分詞（副詞的形容詞）は、関係節を作る機能⁴を除くと、その機能と分布は形容詞に非常に類似している。分詞と形容詞は複数形を持たず、エザーフェ構造で名詞に続く。いくつかの方言では名詞を前から修飾する例も見られる。形容詞と同じように分詞も述語の位置に現れる。分詞は時々語彙的なカテゴリーに移行し、名詞になる場合は、当然複数形も持つ (5)。

- (5) did-agī va šunid-agī-ho-i Mubin
see(PST)-agī and hear(PST)-agī-PL-IZ Mubin
'what/things that Mubin saw and heard'

Ido (2005: 66) によると、北部方言の分詞はチュルク諸語の分詞との類推によって理解することができ、タジク語の過去分詞（本発表での過去分詞 2）はウズベク語の過去分詞 *-gan* と対応するという。

1.3. Soper (1987)

Soper (1987: 97) は、Rastorgueva (1954: 233) の「(タジク語の) 方言では、タジク語とウズベク語の分詞の用法は、特にその述語的用法ではほぼ完璧に対応している」という記述を引用した上で、タジク語の完了形（例：*raft-agī* 'he has gone'）は明らかにウズベク語の *-gan* と対応すると述べている。Soper (1987: 105) は、ウズベク語の影響を反映している点として以下の 3 つを挙げている。

- i. 動詞の後に主語を表す人称代名詞が現れうる
- ii. 動詞形式が人称・数の一致なしで現れうる
- iii. 否定が少なくとも 3 つの異なる方法で形成される

1.4. Windfuhr (2006)

Windfuhr (2006: 263) は、タジク語において完了分詞 *-a* に形容詞的接尾辞 *-i* が付加され、二次的な分詞が作られると述べている (*raft-a > raft-ag-i*)⁵。Windfuhr (2006: 268) は、タジク語の完了分詞の発展はおそらくウズベク語に 2 つの完了分詞があることと関係していると述べている。1 つ目は、定動詞として使用される場合に伝聞を表す接辞 *-ib*、2 つ目は、伝聞を表す機能を持たない接辞 *-gan* であり、以前からタジク語学者はウズベク語の *-ib* とタジク語の *-a*（本発表での過去分詞 1）、*-gan* と *-agī*（本発表での過去分詞 2）を関連付けていたという。

⁴ Ido (2005: 82-85) によると、過去分詞 2 が関係節で最も頻繁に使われる分詞形態である。分詞で終わる関係節は、エザーフェ構造で名詞句に続く。

Duxtar-i [rūymol xarid-agī] hamsoya-i most
girl-IZ kerchief buy(PST)-agī neighbour-IZ we.COP.3SG
'The girl who bought a kerchief is our neighbour.'

⁵ Windfuhr (2006: 263) によれば、語末が *-a* である語の後ろに接辞 *-i* が付される場合、間に *g* が現れるという。そのため、過去分詞 2 は *-āi* ではなく、*-agī* という形式になるとしている。

1.5. 問題提起

上述のように、先行研究では（主に標準語について）過去分詞 1 と 2 の両方が形容詞的、名詞的、副詞的な用法を持ち、主な違いは文体であるという記述や、過去分詞 1 とウズベク語の副動詞 *-ib*、過去分詞 2 とウズベク語の形動詞 *-gan* との関連についての記述などがある。しかし、サマルカンド・タジク語に関する記述や例は見当たらない。サマルカンド・タジク語の母語話者である筆者は、当該言語の 2 つの過去分詞の間にはっきりした使い分けがあると考え、それを立証するために調査を行うことにした。本発表では、サマルカンド・タジク語における 2 つの過去分詞の使用実態と、ウズベク語の対応形式との関連性について述べる。

2. 調査

2.1. 調査方法

サマルカンド・タジク語の母語話者の発話を書き起こし、分析を行った。録音は 20 分 12 秒で、語数は 2400 語である。会話の内容は昔の回想であり、発話者 A が発話者 B とその弟を連れて、外国で 3 年間暮らした話である。発話者は A（1949 年生まれ、女）、B（1969 年生まれ、男）、C（1971 年生まれ、女）、D（1997 年生まれ、女）の 4 人で、いずれもサマルカンド州タイロク区出身である。

2.2. 調査結果

調査の結果、過去分詞 1 は 59 例、過去分詞 2 は 54 例抽出された。それらの用法別頻度は表 1, 2 の通りである。用法は Perry (2005) の分類に従い、名詞的、形容詞的、副詞的用法の 3 つとした。形容詞的用法はさらに述語用法と名詞修飾用法（前置修飾、エザーフェ修飾）に下位分類し、副詞的用法は補助動詞構造の主動詞とそれ以外に分類した。

表 1: 過去分詞 1 の用法別頻度

名詞的	0
形容詞的（述語）	0
形容詞的（修飾）	0
副詞的（主動詞）	28
副詞的（主動詞以外）	31

表 2: 過去分詞 2 の用法別頻度

名詞的	2
形容詞的（述語）	44
形容詞的（前置修飾 + IZ 修飾）	7+1
副詞的（主動詞）	0
副詞的（主動詞以外）	0

表 1, 2 から分かる通り、過去分詞 1 は副詞的用法のみで使用され、補助動詞構造の主動詞であるものが目立った。それ以外は、動詞の連鎖と列挙で多くの例が見られた。一方、過去分詞 2 は主に形容詞的用法で使われ、述語用法の例が最も多かった。名詞修飾用法の例は 8 例で、前置修飾が 7 例、エザーフェ修飾が 1 例であった。他に、過去分詞 2 に複数接辞が付され、「～した人」を指す名詞的用法の例が 2 例見られた。

以上の結果から、サマルカンド・タジク語の過去分詞 1 と過去分詞 2 は、相補的に使い分けられていると考えられる。過去分詞 1 (*-a*) はウズベク語の副動詞 *-ib* と、過去分詞 2 (*-agi*) はウズベク語の形動詞 *-gan* と用法が対応している（ウズベク語との関連性については第 3 節で後述する）。以下、それぞれの過去分詞の例を、用法別に挙げて説明する。

2.2.1. 過去分詞 1

副詞的用法 (主動詞)

まず、過去分詞 1 が補助動詞構造の主動詞になる例を挙げる。(6) は、過去分詞 1 と過去分詞 2 が並んで補助動詞構造を成している文である。この例で、過去分詞 1 は語彙的な意味を表わす主動詞、過去分詞 2 は主動詞に文法的な意味を加える補助動詞として機能している。

- (6) Bozi ka šišť-agi. In binni vay-a gazid-a kit-agi.
play do(PST)-a sit(PST)-agi this nose that-ACC bite(PST)-a take(PST)-agi
'They were playing. He bit his (the other person's) nose (to his own benefit).'

副詞的用法 (主動詞以外)

(7) は過去分詞 1 が連鎖的に現れている例である。一つ目の節で **burd-a**, **kad-a**, **mond-a** は連鎖されおり、これらが修飾している述語は省略されている (このような不完全な文は会話では起こりうる)。一方、二つ目の節の末にある **tarsid-a** [**be.afraid-a**] は、節の述語である **gurext** [**run.away.3SG**] を修飾している。

- (7) Saldat-o burd-a mo:na paraxod-ba sor kad-a mond-a...
soldier-PL take(PST)-a we.ACC ferry-DAT board do(PST)-a remain(PST)-a,
Dadet hamixel gurext, a ob tarsid-a...
father.2SG.POSS so run.away(PST).3SG from water be.afraid(PST)-a
'The soldiers took us to the ferry and guided us aboard...
Your father got so scared of the water that he ran away.'

2.2.2. 過去分詞 2

形容詞的用法 (述語)

(8) は述語用法の例で、「住んでいた」という過去の状態を表している。同様の述語用法の例が 54 例中 44 例と大半を占めた。

- (8) Mohon Šibirġon-ba šišť-agi.
We Shibirġhon-LOC sit(PST)-agi
'We lived in Shibirġhon (a city in Afghanistan).'

形容詞的用法 (名詞修飾)

次の (9) では (8) と同じく動詞 **šišťan** 'to sit' が使われているが、この文では過去分詞 2 **šišť-agi** が名詞 **xoneton** を前から修飾している。同様の前置修飾の例は 54 例中 7 例見られた。一方、ペルシア語の典型的な修飾構造であるエザーフェ構造の例は (10) の 1 例のみであった。

- (9) Šišť-agi xoneton=mi? (10) Unja joy-i me-raft-agi nest.
sit(PST)-agi house.2PL.POSS=Q there place-IZ IMPF-go(PST)-agi exist.NEG
'Is (it) the house you lived in?' 'There is no place to go.'

名詞的用法・形容詞的用法（述語）

次の (11) は、一文に過去分詞 2 の名詞的用法と形容詞的用法（述語）が共起している例である。一つ目の *tūy šagi-yo* [wedding become(PST).*agi*-PL] は、複数接辞 *-yo* が付き、「結婚した人々」という意味を表わしている。二つ目の *mū-pūšt-agi* [IMPF-wear(PST)-*agi*] は、未完了接辞の *mū-* が動詞語幹の前に付き、過去の習慣や意図された動作「着ていた」を表している。

- (11) *Vay-a tūy šagi-yo mū-pūšt-agi=mi?*
that-ACC wedding become(PST).*agi*-PL IMPF-wear(PST)-*agi*=Q
'Was it worn by those who were married?'

3. 考察

上述の通り、サマルカンド・タジク語では過去分詞 1 と過去分詞 2 の用法に明確な違いがあることがわかった。過去分詞 1 の用法は副詞的用法（補助動詞構造の主動詞、連続動詞構造）である一方、過去分詞 2 の用法は形容詞的用法（述語用法と名詞修飾用法）と名詞的用法であった。過去分詞 1 の名詞的用法や形容詞的用法、過去分詞 2 の副詞的用法の例は、サマルカンド・タジク語を対象とした今回の調査では抽出されなかった。よって、サマルカンド・タジク語では 2 つの過去分詞が相補分布している蓋然性が高いと言える。以下では、ウズベク語との類似性について述べる。

ウズベク語との類似性

調査で抽出されたサマルカンド・タジク語の過去分詞 1 と過去分詞 2 の例は、すべて機能的にそれぞれウズベク語の副動詞 *-ib* と形動詞 *-gan* に対応していた。以下に、一部の例をウズベク語訳と共に示す（ウズベク語訳は筆者による）。

- (12) サマルカンド・タジク語: *Mo:n Šibirg'on-ba šišt-agi.*
we Shibirghon-LOC sit(PST)-*agi*
ウズベク語: *Biz Shibirg'on-da yasha-gan-miz.*
we Shibirghon-LOC live-PTCP.PRF-1PL

- (13) サマルカンド・タジク語: *Šišť-agi xoneton=mi?*
sit(PST)-agi house.2PL.POSS=Q
ウズベク語: *Yasha-gan uy-ingiz=mi?*
live-PTCP.PRF house-2PL.POSS=Q

(12) は、サマルカンド・タジク語では過去分詞 2 が述語用法で使用されている例である。同じく、ウズベク語でも形動詞 *-gan* が述語用法で用いられている。ここではほとんどの形態素が一对一に対応しているが、唯一の違いはウズベク語で述語に人称語尾が付いていることである。タジク語の分詞は述語用法で用いられる場合、人称語尾が付されない。一方、ウズベク語の *-gan* は述語用法で用いられる場合に人称語尾が付される (Bodrogligeti 2003: 694)。名詞を修飾する用法ではこの人称語尾は現れず、(13) では全ての形態素が一对一に対応している。

過去分詞 1 に関しては以下の (14) に見られるように、ウズベク語の副動詞 **-ib** と対応している。

(14) サマルカンド・タジク語:	Raft-a	kift-a	om(a)d-am	soni.
	go(PST)-a	take(PST)-a	come(PST)-1SG	after
ウズベク語:	Bor-ib	ol-ib	kel-di-m	keyin.
	go-CVB	take-CVB	come-PST-1SG	after
	'After, I went (there) and brought (it) back.'			

このように、サマルカンド・タジク語の過去分詞 1 はウズベク語の副動詞 **-(i)b**、過去分詞 2 は形動詞 **-gan** と対応することから、当該言語ではウズベク語との接触により 2 つの過去分詞の分布が相補的になったと考えられる。

4. 今後の課題

今回扱ったデータは、20 分ほどの録音データ 1 つのみであったため、今後はデータを増やし、より多くの例を分析する必要がある。先行研究の記述から、標準タジク語とサマルカンド・タジク語の間には差異があると考えられるため、標準タジク語についても調査を行い、サマルカンド・タジク語と対照することも今後の課題である。

略号一覧

ACC: Accusative / COP Copula / CVB: Converb / DAT: Dative / IZ: Izafet / IMPF: Imperfect / NEG: Negation / OBJ: Object / PL: Plural / POSS: Possessive / PRF: Perfect / PST: Past / PTCP: Participle / Q: Question / SG: Singular

参考文献

- Bodrogligeti, András J. E. (2003) *An academic grammar of Modern Literary Uzbek*. München: Lincom Europa.
- Ido, S. (2005) *Tajik*. Languages of the World / Materials 442. München: Lincom Europa.
- Perry, J. R. (2005) *A Tajik Persian Reference Grammar*. Leiden - Boston: Brill.
- Rastorgueva, V. S. (1954) *Kratkiy ocherk grammatiki tadjikskogo yazika*. Moskva: Nauka
- Soper, J. D. (1987) *Loan syntax in Turkic and Iranian: The verb systems of Tajik, Uzbek and Qashqay*. Michigan: University Microfilms International. Dissertation.
- Windfuhr, G. and J. R. Perry (2009) Persian and Tajik. In G. Windfuhr (eds.) *The Iranian Languages*. 416-544. London and New York: Routledge.
- Windfuhr, G. (2006) Language change and modeling modal axes. In L. Johanson (eds.) *Turkic-Iranian Contact Areas- Historical and Linguistics aspects*. Turcologica 62. 263-281. Wiesbaden: Harrassowitz Verlag.